

第76回町田市環境審議会 議事要旨

【日時】2020年11月17日(火) 18:30-20:30

【場所】町田市庁舎2階 市民協働おうえんルーム

【出席者】

委員：堂前委員(会長)、鳴海委員(職務代理)、藤倉委員、佐藤委員、仁部委員、野村委員、宮下委員、大谷委員、木村委員、瀬田委員、渡邊委員

事務局：環境資源部 荻原、環境政策課 宮坂、川瀬、土志田、井上、西、奥山、香山、藤森、環境・自然共生課 藤原、大西、粕谷、田邊

コンサルタント：建設技術研究所

傍聴：6名

【欠席者】

委員：根本委員

【資料】

資料1：「第三次町田市環境マスタープラン」策定の進め方

資料2：「第三次町田市環境マスタープラン」策定に向けた方向性等の検討

資料3：意見シート

参考資料1：基礎調査結果(市民・事業者等のアンケート調査結果)

【議題】

「第三次町田市環境マスタープラン」の策定について

(1) 「第二次町田市環境マスタープラン」の概要

- 事務局から、現行計画の説明を行った。

堂前会長：アクションプランとマスタープランの関係について、マスタープランに施策の方向があり、アクションプランでは実際にどういふことをやるのかということか。実際にやったことが目標を達成しているかどうかを評価するということがよいのか。

事務局：そうである。

(2) 「第三次町田市環境マスタープラン」策定の進め方

事務局より、資料1について説明を行った。

藤倉委員：町田市環境基本条例の9条に基づく基本計画と11条に基づくアクションプラン、行動計画を1つの環境マスタープランの中に両方入れ込むということか。これは、条例上は問題がないと理解してよいのか。

事務局：今の計画では、アクションプランに環境行動指針を位置づけるということで市民や事業者の取り組みを記載している。その環境行動指針になる部分を環境マスタ

ープランにも記載することで、この9条と11条の内容を満たした計画を作る。

鳴海委員：別々にしていたものをまとめる理由は何か。

事務局：10年間の計画を策定すると、途中で社会情勢の変化などで修正する必要があることが考えられる。10年間の計画に合わせてアクションプランを盛り込んで、計画の途中で見直しができるようにする。

事務局：基本計画に付随している部分があり、それに基づいて行動する部分、施策を行っていく部分は密接不可分なものであるが、以前の計画でもアクションプランの中で変えていきたいというときに齟齬が出たり、うまく整合が取れない部分が出たりしてきた。そういうことがないように、今回は計画の中でこのような形を考えている。

鳴海委員：以前はアクションプランが前期と後期で切り替えていたが、今度は一緒にすることでもっと頻繁に変えられるということか。

事務局：必要がある場合にはこちらの審議会での必要性についてご審議いただいて、その後で変更していきたい。

大谷委員：SDGsは、多くの人の意識をまとめ上げていくのに大きな役割を果たすと思う。町田市としてSDGsはどのような位置づけで捉えているのか。

事務局：現在の町田市の考え方としては、SDGsを積極的に押し出してはいないが、SDGsの考え方と市の施策の考え方は一致していると考えている。今、市の基本構想・基本計画基本計画である「(仮称)まちだ未来づくりビジョン2040」を策定中で、そこではSDGsのアイコンを紐づけするような形で載せることを考えている。これから、その辺りのところも進んでいくと考えている。

大谷委員：その担当部署はあるのか。

事務局：市全体の話としては政策経営部が担当部署だ。もちろん環境資源部も関係のある施策が多い。

(3) 「第三次町田市マスタープラン」策定に向けた方向性等の検討

事務局より、資料2の11ページまでの説明を行った。

テーマ① 町田市において着目すべき環境特性・強み、環境課題

堂前会長：町田市の環境における主要な課題についてのご質問、ご意見をいただきたい。

渡邊委員：表7「町田市の環境における主要な課題」の②、東京都の環境基本計画では30%に対して町田市は2018年度が2.3%とある。この2.3%はどこから出てきた数字か。低すぎるという印象だ。

コンサルタント：町田市内の電力消費量と町田市内に固定価格買取制度で導入された太陽光発電量を割り算することで2.3%を求めている。

渡邊委員：東京都の計算方法とは異なっているという理解でよいか。

コンサルタント：異なっている。

仁部委員：今のことに関連して質問がある。30%は目標だが、この2.3%に対して東京都は

何%なのか。これだけでは町田市が低いのか、高いのか、普通なのかがわからない。ほかの自治体はどのぐらいなのかがあると比較ができるのではないか。

コンサルタント： 算定は可能なので、そちらも併せて算定する。

仁部委員： 電力会社の者としては、まず発電側が化石燃料から再生可能エネルギーへの変換を考え、加えて需要側でも電化について考えてほしい。例えば電気自動車の普及も、それが課題なのかも含めて議論の余地がある。

最近では災害が多くなっており、去年は千葉で何日間も停電が起きた。そういうことが避けられない時代となっているのであれば、電気自動車は蓄電池の働きもするので、環境と併せて防災という意味でも役立つものだと考えている。エネルギーを作る側と使う側の両面で見ること必要だ。

事務局： 検討していきたい。「生活スタイル」にも関わってくることである。

木村委員： 発電の話に関連して、売る電気だけではなくて小さい発電、例えばスマホを太陽光で充電するなど、電卓もソーラーが当たり前である。そういう小さな発電に関しても普及を促進することも必要だ。

地球温暖化の総合的な対策では、防災対策と環境施策をリンクさせることが効果的だと考える。玉川学園に住んでいるが、坂が急峻で災害が起きたら土砂崩れが起きるようなところ、谷底で水が一時的にあふれそうなところを日常的に目にしている。そういう場所、例えば貯水池を普段は運動場や遊び場という魅力的な楽しい施設として使い、それが環境にも防災にも役立つようにする。土砂崩れに対しては竹を植えるなど、暴風雨・土砂災害に対して緑をリンクさせていく施策がいいのではないか。

町田市にはいろいろな特色がある町があり、それが町田の魅力だという話があったが、その町ごとの重点環境施策があってもいいのではないか。例えば相原と中心市街地では、日頃環境的に対処しなければいけないことが違っている。

事務局： 小さな発電については検討したい。2点目の防災については、表7の③の「適応のあり方」に絡めながら表現を検討する。3点目の町ごとの環境施策のあり方や特性は新しい視点で、今後、検討していきたい。

木村委員： 資料2の10ページ、表7の④に「市街地の中でまとまった緑を確保することは…」とある。緑が減っているという資料をいただいたが、まとまった緑、保全しなければいけない大きな里山だけではなくて、住宅地の小さな緑、シンボルツリー1本でも生垣でも良いが、それが町の中でつながることによって緑のネットワークになっていき、生きものが生き永らえることにつながっていく。大きな緑だけではなくて小さな環境も環境施策の中に入れていけば、地球環境を守ることにつながると思う。

事務局： この「まとまった」という言葉は表現も含めて検討する。また、住宅開発するときには小さな緑を残す取り組みがある。実際、昆虫は小さな緑を渡って移動している。まとまった緑は一度失われると回復が難しいので重点を置くところだが、身近な緑も重要な緑として位置づけていきたい。多くの小学校に、生きものが生息できるビオトープを作るという取り組みもある。そういう取り組みの中で推進

していきたい。

テーマ② 次期計画で目指すべき環境像検討のためのキーワード・フレーズ等のアイデア・着想

事務局より、資料2の12ページから説明を行った。

堂前会長：次期計画の環境像を考える上でのキーワードやフレーズについてご意見、ご質問はあるか。最終的には「●●まちだ」を作るために何か強調したほうがいいのかというものがあれば、お願いしたい。

藤倉委員：「環境と経済の統合」という視点が少ない。今コロナで経済が世界的に悪くなっているが、EUではグリーンリカバリーという、経済復興するときに低炭素化に持っていこうという方針がある。国の環境基本計画や循環型社会形成推進基本計画でも、資源生産性、環境効率性など、経済活動は増えるがCO2は減るという度合いをどうやって見ていくかという話がどんどん出てきている。経済の視点が環境にあってもいいはずだ。具体的な言葉が出ないが、そういう未来像が見えるような視点があるといい。

事務局：資料2、表8の「社会動向・情勢」で藤倉委員がおっしゃったようなことを記載したい。

野村委員：キーワードやフレーズは市民、事業者、学生等のアイデア・要望等を適宜抽出された部分だと思うが、環境像については事務局で整えるのか。市民が環境像を考えることはないのか。

事務局：最終的に文章として案を整えるのは事務局で行う。これまでワークショップやタウンミーティングなどで市民の方々からいただいた意見を、ここに反映させている。

野村委員：例えば「みんなでつなぐ持続可能なまちだ」という環境像は、最終的に事務局で幾つか作ったものを生かしていくということか。

事務局：事務局で複数の案を作り、こちらの審議会に提示してご意見をいただいて修正したい。

野村委員：今回の「(仮称)まちだ未来づくりビジョン2040」は、市民の方々が関わっており、市民が自分事として捉えていただくことにつながっている。あと、木村委員がおっしゃったように町田市の中で町ごとの課題、市民が感じている部分がある。一般市民は市に対しての関わりが少ない人が多い。町ごとにしたほうが自分事として捉えられると思う。環境像の設定も、地域ごとによって感じ方が違う部分があると思うので、市民が参加して環境像が決まっていく道筋が見えると、自分事として捉えるということにつながっていくと感じた。

堂前会長：今後、この続きで肉付けしていくときに具体的にどうやって自分事として捉えられるかということについてアイデアを皆さんからいただく段階もある。

事務局：参考にさせていただく。

鳴海委員：望ましい環境像という上位概念があって、そこに向かっていろいろと目標や方向

性が決まっていくと思う。環境像は最終的にプランができあがるときには決まっているものだが、途中で変えていくということもあるのか。今決めてしまわなければいけないというものではない。

事務局： そのとおりである。

テーマ③ 次期計画における基本目標設定のために必要・追加すべき視点

事務局より、資料2の15ページ以降の説明を行った。

堂前会長： この基本目標についてご意見、ご質問をいただきたい。

木村委員： 資料2、表10の④「生活環境の保全」は大気質、水質だけか。景観は入らないのか。

事務局： 景観は生活環境の中に入る。たばこのポイ捨て、路上喫煙なども含まれる。

藤倉委員： 地球温暖化防止について、地球温暖化対策実行計画（区域施策編）を含めるということだが、気候変動適応計画についてはどう考えているのか。

事務局： 適応策も入れる必要があると考えている。

藤倉委員： 適応計画的なものを入れるのかどうか。

事務局： 適応計画として含めるかは検討していくが、適応計画的なものは入れることを想定している。

大谷委員： SDGsは分類が目的ということではないと思う。地球環境と地域環境という視点を養っていくために、分類をして、それと他の分類との関係、自分たちが取り組んでいることとの関係性を見ていくことは重要だ。分類にとどまらずに、その分類の奥にある他分類との関連性をこの中で表していくといい。

堂前会長： つながりがわかるようにということか。

大谷委員： 当然のことだが、すべてが同時進行している中で環境に取り組むことはとても大変なことだ。役所の中の調整も大変だと思うが、SDGsみたいな道具を使ってその壁を少しずつ越える手段を講じていくといいのではないか。

事務局： この中には表しづらいところもあるが、環境資源部としては市に対してSDGsに積極的に関わっていこうという働きかけをこれまで行ってきた。役所の中の我々の事業や施策、市民それぞれの行動がどういうつながりを持つのか。それを連結するための1つのツールとして捉えている。大谷委員がおっしゃったような意味では使っていこうと考えている。それをどう表現するのかは難しい。

鳴海委員： 現行計画には5本の基本目標があり、町田市で特に着目すべき課題、市民や事業者アンケートからニーズは出ていると思う。現行計画で基本目標5本すべてにおいて重点的に議論していくのは大変だったので、今回の4本の基本目標ではウエートの掛け方に違いがあってもいいのではないか。

事務局： 議論されていく中でその濃淡は見えてくると思うので、計画に反映させていきたい。

堂前会長： 追加のご意見は意見シートに記入して事務局に提出してほしい。

堂前会長：最後に全体を通してのご質問、ご意見をいただきたい。

佐藤委員：新型コロナウイルス感染症に配慮し、オンライン会議等の開催も今後考えてほしい。

事務局： 次の1月19日と2月9日の審議会は対面とWeb会議の併用を考えている。

堂前会長：事務局から連絡があれば、お願いしたい。

事務局： 今日事務局としてはキックオフ的な意味合いの開催であった。かなりの情報を出したが、限られた時間で皆さんからご意見をすべて出してもらうのは難しいので、あとから意見シートに記入して提出していただきたい。本日の議論に感謝するとともに、これからもご協力をよろしくお願いしたい。

- 事務局から、意見シートの提出方法、今後のスケジュールについて説明を行った。

堂前会長： 本日の審議会はこれで終了といたしたい。